

の中に記述されているアフリカ、すなわちエチオピアやエジプトの栄光の歴史を黒人のルーツと見做した。特に詩篇六八章三一節の「エジプトから王が到来し、エチオピアは神に向かつて手を伸べる」という箇所は、エチオピアとエジプトに神秘的な解釈を与え、黒人の救済や千年王国の到来を予期させるものとして受容されていた。新世界における黒人の苦難を宗教的に解釈することは、エチオピアとエジプトに預言的な力を与え、アフリカに対する「暗黒大陸」といったイメージや「非文明的で野蛮なアフリカ人」といった言説を解体する作用を持っていた。ラスタファリアニズム運動とネイション・オブ・イスラムは、このエチオピアニズムの伝統とマーカス・ガーヴェイの「黒人の神」といった思想を継承し、西洋キリスト教は黒人を操るための最適の宗教であると主張した。そして白人によって歪められたテクストとしての聖書や説教は、白人優位を植え付けるためのプロパガンダであるとし、その神学的見地から本質的な「悪」としての白人像をつくりあげていった。その結果白人に対するイメージが転換し、彼らとの接触が汚穢の恐怖へと変化していった。かつて白人と接触することで「人間化」すると理解されていた「白い普遍」が、白人との接触＝「悪魔化」といった言説に取って変えられたのである。両宗教運動における新世界の黒人の救済は、悪魔的な西洋キリスト教の枠組みの中では永久に達成されない。ラスタファリアニズム運動の提唱者であるレナード・ハウエルはキリスト教批判は、ジャマイカで広く伝播されたバプテスト派やメソジスト派といったプロテスタント諸派ではなく、主にローマ教皇とカトリシズムに向け

られているが、それは奴隷制度の記憶が何よりも重要な要素となっているからであり、その苦難の記憶と奴隷制度によってもたらされた離散の経験が、「ブラック・ディアスポラ」の宗教を形づくっているのである。

エリアーデにおける学問と芸術の一体性

—— 美学の観点からの考察 ——

藤井 修平

本発表では、ミルチャ・エリアーデの宗教学理論を、それが宗教現象のみならず芸術作品をもその射程に収めているという「学問と芸術の一体性」という観点の下に考察し、彼の理論と美学の分野における理論との共通性を明らかにすることを目的にしている。それによりエリアーデに対する新たな解釈が呈示されるとともに、宗教学と美学の協働の可能性についても示唆が得られるであろう。

まず、エリアーデが有していた「学問と芸術の一体性」として、彼が自らの文学的創作と学術的著作の執筆は相補的なものと考えていたことを示す。エリアーデはこれを宗教と芸術の領域一般へと拡大して、両者の共通点を見出していた。『宗教の歴史と意味』や『神話と夢想と秘儀』においては、どちらも「時間からの超出」を表現している点に類縁性が存在し、さらに現代における芸術は「偽装された聖なるもの」としてみなすことが可能であるという主張がなされている。現代においても芸術が偽装された形で聖を表現しているために、このことは彼の理論の根幹である「時代を超えた聖なるものの普遍性」を支

える役割をも果たしている。

エリアーデがシカゴ時代に提唱した解釈学としての宗教学の方法論にも、宗教と芸術が共にその射程に収められている。彼の述べる「創造的解釈学」は、「対象を解釈しその価値を説明するとともに、その結果として解釈者や、その読者をも変革する」という、価値の拡大の運動に参与する学」と定式化できるが、これはあらゆる領域を対象とし、哲學家、芸術家、芸術批評家に影響を及ぼすとされていた。このような領域横断的な側面が強調された学問形態が、「新しいヒューマニズム」と呼ばれているものである。

こうした基礎を有していたために、エリアーデは芸術作品の解釈が可能であった。その例としては「インドの芸術と図像」や「ブランクーシと神話」における論述が挙げられる。そして「新しいヒューマニズム」の構想の実現とみなせるものとして、芸術分野へのエリアーデの影響を窺うことができ、とりわけ建築学にはエリアーデの聖なる空間理論の応用の例が存在する。

エリアーデの理論が芸術に対しても向けられたものであったとするならば、狭義には「美」という概念への哲学的な思惟であり、広義には芸術作品の分析や美術史を含む美学の観点からは彼の理論はどのように評価されうるであろうか。これを明らかにするために、エリアーデと美学における理論との比較を行なう。ここでは両者が共通して有する見解として、「非論理的認識の強調」、「研究対象に向けられた存在論的見解」、「シンボルへの関心」、「解釈学の展開」という四つの要素を挙げることができる。これらの要素は、エリアーデの理論が宗教現象を説

明するためのものでありながら、同時に美学理論としても機能しており、美学の伝統の中に位置付けることが可能であるという主張を支持するものである。

以上の議論を宗教学全般に対する見解へと広げることが可能であろうか。そのための糸口は、これまでの比較によって導かれる両者の根本的な共通点、「非理性的なものへの着目」にあると考えられる。宗教学においても美学においても、理性ないし論理では把握し尽くされない領域の仮定が、多くの理論をもたらしてきた。これは両分野において指摘されるように、近代科学に対するアンチテーゼとして成立したという意味において、「近代の産物」ともみなすことはできるが、近年ますます脚光を浴びるようになっていく種々の「科学的手法」を補うものとしての、美学の見地に学んだ宗教学といった形の理論も、その意義を失っていないのではないだろうか。

在ポルトガル・ルーマニア大使館における

エリアーデの宗教思想

奥山 史亮

本報告は、エリアーデがポルトガル期（一九四〇―四五年）に執筆した資料を整理し、異国であるポルトガルで描かれたルーマニア宗教文化の特徴を明らかにした。エリアーデは戦中、リスボンのルーマニア大使館に文化参事官として勤務した。文化参事官としてエリアーデは、ルーマニアとポルトガルが共有する宗教性について記述することをせまられ、地域横断的な文化現象として「宗教」に関する思索を深めた。さらに、ソヴィ